

A study of music therapy for chronic schizophrenia patients

浅野, 雅子
九州大学大学院芸術工学府

<https://doi.org/10.15017/19749>

出版情報 : 九州大学, 2010, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

第 6 章

結論

精神障害領域におけるリハビリテーションを概観し、中でも音楽療法に注目した中で、慢性期統合失調症患者に対する音楽療法の効果について、実証的根拠を示すことを試みた。

はじめに、歌唱活動と合奏活動という内容の違いによる音楽療法の効果を確認し（第 2 章）、次に対照群を設定した上で慢性期統合失調症患者に対する無作為抽出における音楽療法を実施した（第 3 章）。この実験で音楽療法の効果は個人的な音楽背景によって異なることと一部の認知機能が改善することを確認した。そのため、個人的音楽背景の違いによる音楽療法の効果への影響を調査し（第 4 章）、最後に音楽聴取が認知機能へ及ぼす影響（第 5 章）を検証した。

第 2 章では医療の現場においては対照群を設定することが困難なことから、対照群を設けることはせず、音楽療法の中で多くの実践が行われている歌唱と合奏という異なる方法による介入の効果について、介入前後の比較と内容の違いによる効果の比較を両者の面から検証した。その結果、音楽内容の違いにより得られる効果に違いがあることを確認した。すなわち、歌唱活動と合奏活動ともに不参加の自由を保障した活動運営を行った結果、歌唱活動では精神症状を刺激する可能性があるものの発散的に次々と歌っていくことで気分を中心とした改善が得られ、合奏活動においては現実的で他者との協調性を要する訓練的な活動により精神症状の改善が得られ、作業遂行の向上が得られた。これらの結果から、導入する音楽療法の内容が異なる場合に、異なった効果が得られるので、確かに音楽療法の効果はあると確認することができた（第 2 章）。

第 2 章より、音楽療法を導入することによる効果を確認したことから、第 3 章においては、国内外いずれにおいても実験的検証の面が充分ではない音楽療法のエビデンスを示すことを主目的とし、慢性期統合失調症患者を対象に対照群と実験群を設定し、我が国では報告がされていない無作為抽出化による手法を用いて音楽療法の介入効果を検証した。その結果、音楽療法介入前後において、認知機能の一つである FAB の F2 知的柔軟性において有意な差を認めた。また、多変量解析の結果からは個人によって異なる変化が認められた。すなわち、精

神機能面や社会機能面に関して、改善・悪化といずれの方向に対しても変化をもたらすことが確認された。以上から、音楽療法介入の効果は確かに認められるが、個人によって改善、悪化のいずれの効果もありうることが判った（第3章）。

個人により音楽療法の効果が異なることから、個人の音楽背景別による音楽療法の効果の違いを検証した。第3章による音楽療法介入で得られた各種検査結果の変化量を分析対象として、個人の音楽背景別に比較検定を行った。その結果、音楽療法を導入した実験群において、日常的にラジオで音楽番組を聴取する方は REHAB の逸脱行動が改善し、日常的に歌唱を行う方は FAB が向上するという結果が得られた。対象群では有意な差を認める項目はなかった。よって、音楽療法により得られる治療効果は対象者の個人的音楽背景要因と関連することが示された。このことから、音楽療法を導入する際、対象者の音楽背景を踏まえた上で介入を行っていくことが重要であることがいえた（第4章）。

最後に、第3章において音楽療法介入により一部の認知機能の改善が示されたことから、音楽療法の効果をよりよく理解するため、音楽聴取が種々の課題遂行に改善をもたらすかどうかを心理実験によって検証した。この実験では大学生に対して音楽条件の有無による認知機能検査を実施した。その結果、今回用いた認知機能検査では、大学生への音楽聴取の影響は認められなかった。しかし、個人の音楽背景別に検証を行うと、音楽の好みの程度の違いにより認知機能検査の成績が異なり、大学生においても個人の音楽背景によって課題遂行に差異が生じた。よって、心理学的実験においても個人の音楽背景により結果が異なることが示され、改めて個人の音楽的背景を考慮することの必要性を認めた（第5章）。

以上より、慢性期統合失調症患者に対する音楽療法は、活動介入により精神機能面、社会機能面、認知機能面における効果が、確かに存在することが認められた。しかしこれらは、個人の音楽背景によって変化の仕方が異なっていた。このことは、対象者の音楽背景に基づいた音楽療法の導入方法を考えていくようにすることが、治療効果を高めることになるといえた。今後は、適応例や不適応例に対する詳細な分析を行った上でより効率的な個別支援へ繋げていくことが課題である。

全体として音楽療法の効果は確かに存在する。しかし、個人の音楽背景を考慮した治療法を確立することが重要であることが判った。